



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第61回

日本手外科学会を終えて

稲垣克記

(昭和大学医学部整形外科学講座)

目次

- 第61回日本手外科学会を終えて
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-KSSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-TSSHトラベリングフェローを受賞して
- JSSH-TSSHトラベリングフェロー報告記
- 第10回手外科医のリスクマネジメント
- パトンリレー (第3回)
- 第28回手外科親睦テニス大会報告記
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記



第61回日本手外科学会を本年4月26日、27日の両日、東京の京王プラザホテルにて開催させて頂きました。本学会を昭和大学医学部整形外科学講座が担当するのは第42回の本学会以来2回目であり、大変光栄なことでもあります。手外科学会会員の皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。

会長にご指名いただいてから3年をかけ教室をあげて準備を進めて参りました。昨年、日本手外科学会は設立から60年、人であれば還暦を迎えました。そして今回、第61回からは法人である日本手外科学会が運営する初めての学術集会となります。

さて、人類に今日の優れた文化をもたらしたのは脳と手であるといっても過言ではないと考えます。手はきわめて繊細な器官であり、Penfieldが示すように脳と支配が直結しています。手は単純な運動から繊細で複雑な運動、そしてリーチまでを脳の指令により自在に行なう機能を有するOrganであります。近年、手の外科における医学の進歩は3つの大きな軸から成ると考え我々はプログラムをつくりました。一つはマイクロサージャリーから進化した血管付き骨移植と組織複合移植であり、血流の乏しい組織への血流



再開という意味で現在最も注目されている再生医学の応用も可能となる領域です。二つ目はスポーツアスリートに需要が大きい最小侵襲手術であり関節鏡視下手術は手関節、肘関節の不安定症のみならず、mid-carpal, MP, PIP関節 母指CM関節にも応用されるようになりました。三つ目は人工関節、骨接合インプラント、人工靭帯、人工神経など自家組織や他科組織に頼らない人工材料の開発により組織の再構築が容易となった事です。手外科の進歩によるこれらの治療は、人工知能による診断学とともに今後も進歩し進化してゆく分野の一つであろうと思われます。

このように、今回の学会では新しい企画を沢山用意しました。

今回の学術集会には2000名を超える方に参加していただき盛会裡に終えることができました。改めましてご支援をいただいた多くの先生がたへ心から感謝申し上げます。最後に日本手外科学会の益々の発展を祈念させて頂き開催報告を結ばせていただきます。本当にありがとうございました。



JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記



上原 浩介

東京大学医学部 整形外科

はじめに

この度、2018年度の日本手外科学会 Asian (JSSH-HKSSH) Exchange Traveling Fellowに選出していただき、香港に行って来ましたのでご報告させていただきます。香港には3月6日～3月14日の9日間滞在し、学会参加、病院見学をさせていただきました。国際学会が同時開催されており、香港内外の手外科の先生方と交流を持つことができ、非常に充実しておりました。このような貴重な機会を与えていただきました日本手外科学会・香港手外科学会に対して心より御礼申し上げます。

学会

今回はWorld symposium of congenital malformations of hand and upper limb 2018と香港手外科学会の合同開催となっており、両方に参加させていただきました。会期は3月7日～10日の4日間で、会場が1つということから、全日程参加することで上肢先天奇形の治療のおおよそのtrendを知ることができました。最終日には母指CM関節症の研究を発表する機会を与えていただきました。また、懇親会やPresidentであるDr. PT Chanにディナーに招待いただくなど、アジアを中心とした海外の多くの先生と親交を温めることができました。日本からの先生方と食事をご一緒する機会もあり、親睦を深めることができました(図1、2)。

病院見学

最後の3日間は病院見学をしました。

初日はPrince of Wales Hospital (Dr. P. C. Ho) を訪問させていただき、教育的な病棟回診と手術を見学させていただきました(図3)。訪問時には手術を4件見学させていただきました。母指CM関節症に関して、鏡視下にタイトロープやshrinkageで治療したケースシリーズをみせていただき、大変参考になりました。

次に、Alice Ho Miu Ling Nethersole Hospital (Dr. Koo Siu Cheong Jeffrey Justin、図4) を訪問させていただきました。病棟回診、AS assisted distal radius fracture surgeryに関する講義をしていただき、その後は外来見学と手術見学でした。

この日は、JSSH-HKSSH Ambassadorとしてのレクチャー(我々が開発した上肢患者立脚型評価



図1 Dr. P. C. Hoと



図2 Dr. PT Chan、日本の先生方と



図3 Prince of Wales Hospitalでの病棟回診



図4 ホストのDr. Kooと

尺度JHandの開発に関する内容)の機会を与えていただきました。また、母指CM関節症のミニシンポジウムを企画していただき、母指CM関節症のレビューを、東大の今までの臨床研究の結果や現在行っている治療方針などを折り込みつつ発表させていただきました(図5)。

最後に、United Christian Hospital (Dr. Esther Chow)を訪問させていただきました。Dr. Chowはcongenital handの他にAS assisted 母指CM関節固定術に取り組んでいらっしゃるとのこと。母指多指症やTFCC損傷に関する手術を4件見せていただきました。



図5 香港手外科学会ホームページに掲載された告知

さいごに

滞在中、香港手外科学会の先生方には大変気にかけていただき、お世話になりっぱなしでした。これも今までに培われてきた日本手外科学会と香港手外科学会の友好関係に基づくものであると考えられ、諸先輩方に心より感謝いたします。

最後になりましたが、東京大学整形外科手の外科診チーフの森崎 裕先生、fellowship応募に関して相談に乗っていただいた三浦俊樹先生、推薦いただきました田中 栄教授、大江隆史先生、選出いただいた 日本手外科学会理事長の矢島弘嗣先生、国際委員会担当理事の柿木良介先生と委員長の和田卓郎先生に厚く御礼申し上げます。



JSSH-KSSH Traveling Fellow 報告記



宇佐美 聡

東京手の外科・スポーツ医学研究所 高月整形外科病院

この度2018年JSSH-KSSH Traveling Fellowに選出頂き、韓国の手外科学会参加と共に施設訪問をする貴重な機会を得ましたので御報告致します。

韓国手外科学会 Annual International Meeting 2018

2018年11月1日に東京を発ち、当日午後にまずPrecongress dinnerに招待されました。そこで本学会のChairmanであるShin先生、PresidentのKo先生と挨拶し、韓国手外科学会の現理事の各先生方と交流を持ちました。本学会には私の他に、Asian Traveling Fellowとして台湾から3名、マレーシアから2名、シンガポールから1名の計6名が参加しておりました。11月2日からSeoul中心部のSeoul National University Children's Hospitalにて本学会が始まりました。午前にAsian Sessionと題した発表の場があり、15分程度Free-style perforator flapを用いた指部再建について発表しました。座長を含めて4名ほど質問を頂き、有意義な時間となりました。夕方からはPresident dinnerと称した食事会があり、過去に理事をされていた韓国手外科の偉い先生方も含めて大人数での会食となりました。11月3日も引き続き学会があり、韓国手外科医の現状を知る良い機会となりました。発表は全て韓国語であったためさっぱりわかりませんでしたが、スライドが全て英語で作成されているため内容は把握できました。韓国の方が日本より国際色が強く、見習う所があるなと思料しました。本学会では日本人として私の他に関西電力病院の藤尾圭司先生もInvited Speakerとして講演されており、食事を共にする機会がありました。本学会中は全ての食事を韓国の教授の先生方が面倒をみてくださり、厚いhospitalityに感謝が絶えない状態でした。

施設訪問

11月5日と6日にSeoul National University Hospital整形外科のG.H.Baek先生の所へ訪問しました。ソウルで一番歴史のある病院であり、Baek先生は小児先天異常の手術を得意とする高名な教授です。日本ではめったにお目にかかれない患者さんを拝見することができただけでなく、診察のコツなども適宜レクチャー頂き非常に有意義な時間を過ごせました。

11月7日と8日に大邱(テグ)にあるW hospitalを見学しました。ここはPresidentのS.H.Woo先生が10年ほど前に開設した病院ですが、整形外科全体で毎日20~40件程度の手術を行っているhigh volume病院で、韓国で唯一の同種手移植を行ったスタッフのいる病院です(手術自体は近くの

大学病院で行ったとのこと)。幸運にも同種移植を行った患者さんと外来でお会いすることができました。左手関節部での移植でしたが、MP関節に軽度拘縮が残るものの、DIPとPIP関節はほぼfull rangeで動いており、握力も対側の70%程度は出ているとの本人談でした。素晴らしい結果に驚きを隠せませんでした。様々な問題や困難があったことも同時に教えて頂き、日本で行うのは将来的にも非常に難しいかなと感じました。

最後に

今回Traveling-fellowとしてアジア各国の若手外科医と共に研鑽を詰めただけでなく、韓国手外科学会の重鎮の先生方とも知り合う機会ができ大変貴重な経験となりました。

推薦頂いた前東京医科歯科大学形成再建外科岡崎睦教授、四谷メディカルキューブ平瀬雄一先生、訪問先の選定に当たって相談に乗って頂いた南川整形外科南川義隆先生に深謝致します。また、日本手外学会矢島弘嗣理事長、国際委員会柿木良介担当理事、和田卓郎委員長の他委員会メンバーの先生方にも深くお礼申し上げます。

今後とも各国との連携や交換留学などの制度を継続して頂き、日本手外科学会および各手外科学会の益々の発展につながることを期待します。



Precongress dinnerでの様子。



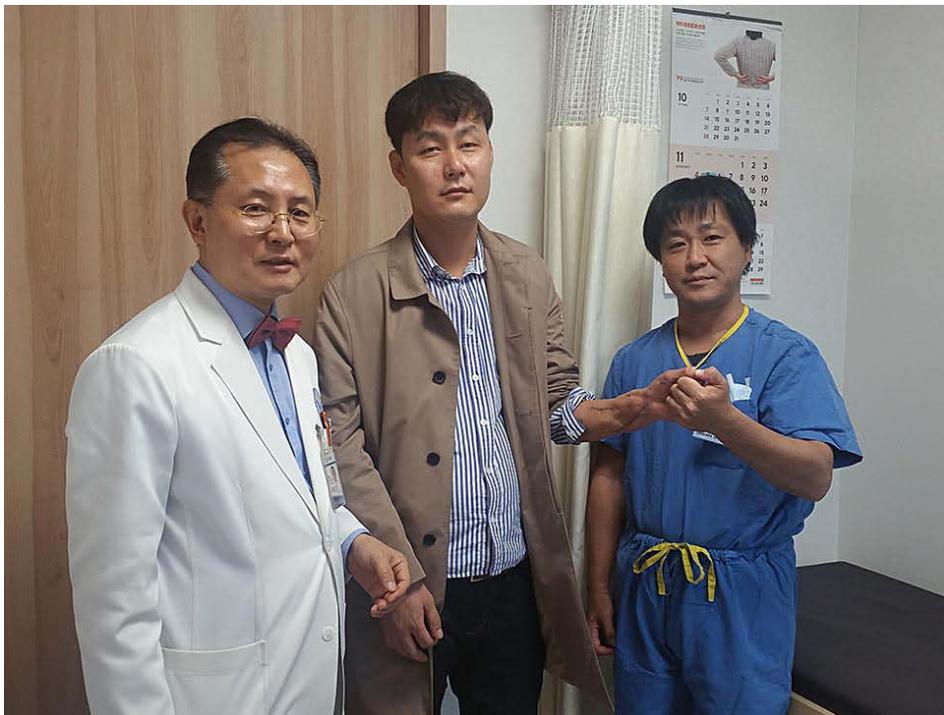
韓国手外科学会場に提示されていたポスター前。



韓国手外科学会中の各国のTraveling fellowを含めた写真。



Seoul National University Hospital外来でBaek先生、スタッフとの写真。



W hospital外来でWoo先生と韓国唯一の同種手移植患者との写真。

JSSH-TSSH トラベリングフェローを 受賞して

佐竹 寛史

山形大学整形外科

日本手外科学会ではAsian Exchange Traveling Fellowとして香港、韓国、台湾との交流を行っています。応募資格は40歳以下ですが、台湾はJSSH-TSSHとしては今年が第1回となり、40歳を超えてはいますが、小生と筑波大学の小川健先生が選出されました。

5月4日に小川先生と一緒に成田を出発し、台北に向かいました。学会が準備してくれていたホテルはツインで、ほぼ初対面の小川先生と二人部屋でしばらく過ごす勇氣はなく、相談し、急遽別々の部屋を予約しなおさせていただきました。5月5～6日、台湾手外科学会に参加しましたが、日本手外科学会との違いは発表時間の長さでした。各演者に与えられた発表時間は20分から30分で、ゆっくりと発表してゆっくりとdiscussionする形で、かなり濃密でした。時間に追われ原稿を棒読みする日本人とは違うなーと思いました。私たちのセッションはAsian Pacific Session



(Orthopaedics) で他にシンガポール、韓国、台湾の先生が発表されておりました。台湾手外科学会は整形外科と形成外科が別々のフロアーに分かれて発表する形でした。小生は荻野利彦先生が考案された先天性橈尺骨癒合症に対する橈骨単純回旋骨切り術の長期成績を発表しました。日本海総合病院形成外科の柏英雄先生が国際先天異常学会で発表され、県立河北病院整形外科の金内ゆみ子先生が機能評価について日手会誌に発表され、それらをまとめさせていただいた形の発表でした。荻野先生からは生前に何とか英語論文としてまとめて欲しいと言われておりましたが、先日 Journal of Shoulder and Elbow Surgery に受理されました (J Shoulder Elbow Surg 2018;27 (8):1373-9)。

学会参加後、数日 Chang Gung Memorial Hospital を見学してきました。以前小生が留学していた病院で、そのときは形成外科にお世話になりましたが、今回は整形外科を見学してきました。病院スタッフも気さくで、いい研修ができました。

小川先生とは1週間、大変濃密な時間を過ごさせていただきました。今度はアメリカ手外科学会のトラベリングフェロー JSSH-ASSH を受賞できるように頑張ろうという話になりましたが、45歳までということで来年がラストチャンスです。応募しようかもう少し考えようかと思っています。今回の機会を今後の日手会の発展に少しでも貢献できるように頑張りたいと思います。



JSSH-TSSH トラベリングフェロー報告記

小 川 健

筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター
茨城厚生連総合病院水戸協同病院

2018年5月4～5日、台北のChang Gung Memorial Hospitalで開催された台湾手外科学会に参加させて頂きました。ゴールデンウィークの後半、山形大学の佐竹先生と成田を飛び立ちました。

TSSHは、アットホームな印象で、発表会場は2部屋のみ、発表時間も最低10分で十分にdiscussionされていました。私たちには20分のプレゼンテーション時間が用意されており、しっかりと聴いて頂きました。その分、進行はルーズであり、発表は全て自身のPCをその都度コネクターにつなぎ変えて行うという、院内の研究会のような雰囲気でした。私の前に発表したシンガポールのフェローは、PCがフリーズし、急遽私のPCにデータを移し発表するというトラブルに見舞われましたが、会場の反応は暖かく、文句を言う方など一人もおりません。そのフェローとは、懇親会では意気投合し、逆に交流が深まる結果になりました。

私は、以前から着手しておりましたキーンバック病に対する骨髄血移植を中心とした創外固定とLIPUSの併用療法について、臨床成績から基礎実験まで全体的に概略を話しました。とても興味を持って聞いて頂き、休憩時間や晚餐レセプションでも、いくつか質問を受けました。落合直之先生が考案され実用化された方法を、現在は私たちの世代が引き継いで行っていますが、私の力不足のため、未だ認知度が低く、会場のほぼ全員が初めて聞いたという雰囲気でした。改めて、広く世界に発信するために、まだまだやることが残されていると考えさせられました。



シンガポール・韓国・中国からのフェローや参加者とも交流できた事は、非常に有意義で、英語でのコミュニケーションが、自分の世界を大きく広げられると再認識させられました。私にとってのもう一つの刺激は、一緒に選出された山形大学の佐竹先生でした。病院見学や観光など、おんぶに抱っこで、初対面であったにも関わらず、研究から私生活に至るまで、多くのお話がありました。有意義な旅ができた最大の要因であったと思っています。最後に、このような機会を与えて頂いた皆様に心より感謝致します。そして、今後の日手会の発展に貢献できるように精進致します。ありがとうございました。

第10回手外科医のリスクマネジメント ～医療での裁判外紛争解決(ADR)について～

勝見 泰和

十条武田リハビリテーション病院 院長

最善と考えた医療行為が医療の不確実性のために悪い結果となることがある。また予想もしなかった医療事故に遭遇することもゼロではない。これらの事が医事紛争となり、更に訴訟まで発展すると極めて強いストレスに晒されることになる。今回は医療での裁判外紛争解決(ADR: Alternative Dispute Resolution)を取り上げ、手外科医のリスクマネジメントについて考えてみる。

一般的な紛争に対して「裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律」が平成16年12月1日に公布され、平成19年4月1日から施行されている。基本理念として、第3条第1項で「紛争の当事者の自主的な紛争解決の努力を尊重しつつ、公正かつ適正に実施され、かつ、専門的な知見を反映して紛争の実情に即した迅速な解決を図るものでなければならない」と記されている。民事において中立な立場の第三者により、当事者の合意を原則とした、裁判によらない解決を促進するための法律である。中立性や公平性の確保や専門家不足といった問題点もあるが、紛争解決までの時間短縮、負担の軽減などの多くのメリットがある。

医療においてもADR法に準じて、弁護士会や医師会が中心となって医事紛争の仲介や和解斡旋などが行われている。京都府医師会でも医療安全対策委員会とは別に医療事故処理室が設けられ、ADRに近い活動を行っている。各診療科の経験豊富な医師をはじめ、弁護士、法医学者などの構成メンバーで、報告された医療事故を非公開で中立・公正に検討している。また一般的な医療水準を考慮しながら、いろいろな視点から討議し、当事者の合意が得られる解決法を提案している。

手術に関連する医事紛争例では、一般的な危険な合併症の説明はほとんどの事例でなされている。しかしながら結果が悪いとやはり医事紛争となり、重篤な合併症となると医事紛争は必発となってくる。それでは100%の合併症の説明ができるかと言えば、そこにも限界があると思う。手術前の不安な時期に、極めて稀なマイナス面の説明をすべて行うことが最良の医療であろうか。最近では医療行動経済学でリパタリアン・パターンリズムという立場からのインフォーム・コンセントが提案されている。選択の自由を確保したままで、人々の行動をより良いものに変えるための政策的介入を認める立場からのインフォーム・コンセントである。チーム医療の中心は患者さんにあり、決定権も患者さんにあるが、より良い選択のためのアドバイスを行うという方法である。

手外科医として他科や他院で生じた医事紛争事例の治療に携わる機会があるかもしれない。その場合には、慎重な言葉を選択してほしい。結果の悪い経過の症例を、後で診察する医師は、反省を含めて適切な診断や最良の治療を提供できるかもしれない。後医は名医であると患者さんには思われる。そのことを肝に銘じて誠実に対応し、不必要な言葉で紛争を拡大しないようにしなければならない。医療事故が起こった時には、医療側は金銭的な賠償にて早期解決を望むが、患者側が求めるものは賠償よりもむしろ事故の真相解明や安全防止対策である。医療裁判で対立して傷つけあうことは不毛なことであり、公平な第三者の介入によって当事者間の合意を得て、解決法を図ることは医療ADRの目標である。医事紛争に携わることは、当事者でなくとも強いストレスがあるのではないかとよく言われるが、私自身は燃え尽きないように一歩退いた位置に自らを置き、公平・中立的な立場で医療ADRに臨んでいる。

手外科バトンリレー (第3回) ～日本手外科学会の幸運な発展～

上 羽 康 夫

京都大学医短部名誉教授、医療法人白菊会理事長

一般的に学会が発展するには時代の要請、会員の情熱と努力、そして周囲社会からの支援が必要である。現在の日本手外科学会 (以後は日手会と略す) は極めて順調に素晴らしい発展を遂げ得たのは、それらの条件が非常に上手く組み合わせられたからであろう。

第二次世界大戦直後1946年にAmerican Society for Surgery of the HandがBunnellら35人の外科医たちによって設立され、この新分野は急速に世界中に広まった。1957年には我国の手の外科学会が天児民和教授 (九大) らによって設立された。1980年オランダのロッテルダムで開催された第1回国際手の外科学会連合 (IFSSH) には多くの手外科医が日本から参加し、1986年には第3回IFSSHが日本で開催された。東京で本学会が開催された後、11月9日～11日に京都国際会議場でIFSSH京都学会 (Post-congress meeting in Kyoto) が開催され、世界各国から多数の手外科医が参加した (写真1)。この経緯から分かるように我国の初期手の外科学会は飛躍的に発展した。この幸



写真1：第3回IFSSH学会京都学会の懇親会場風景

運は非常に多くの方々のご努力によるものであるが、特に我国手の外科黎明期を切り開かれた田島達也・津下健也・三浦隆之(以後敬称略)、次世代の手外科研究・教育の発展に尽力された山内裕雄・矢部裕・児島忠男、マイクロサージャリを手の外科に逸早く導入された玉井進・生田義和、手外科の基礎研究を推進された石井清一などの名を特記しなければならないであろう。また、時代の影響と手外科学会併催の研究会からの支援も忘れてはならない。

朝鮮戦争(1947-1950)では末梢神経外科に画期的な進歩が見られた。それはSeddonによる神経組織の解剖に基づく神経損傷の区分概念：①neuropraxia, ②axonotmesis, ③neurotmesisであった。我国でも末梢神経損傷に対する関心が高まり、多くの基礎ならびに臨床研究がなされた。

「末梢神経を語る会」は1978年10月野村進(金沢大)、佐藤勤也(日大)、原徹也(東大)の3氏が世話人となり発足した。発足直後より討議されていた末梢神経損傷の治療法についての白熱した討論は印象的であった。その議論は後年に我国の末梢神経治療法に大きな影響を与えたのである。その理由は、我国を代表する2大整形外科教室(東大・京大)の教授が共に末梢神経に深い関心を持たれ、且つ治療法に異なる見解を持って居られたからである。伊藤鐵夫(第10回日手会会長、京大教授)は以前から脳性麻痺・末梢神経麻痺に興味を持ち、Seddon区分概念にも精通され、田村清が作成した神経topographic atlasを参考にしてfunicular suture法を推奨し、1977年には著書「末梢神経の外科」を医学書院から出版されていた(写真2)。他方、津山直一(第12回日手会会長、東大教授)は朝鮮戦争後まもなく英国に留学されてSeddonから直々に肋間神経移行術を学ばれ、帰国後は原徹也らを中心にした東大グループを指導して、当時多発していた自動車事故によるroot avulsionや分娩麻痺total typeに対する肋間神経移行術を実践され、簡便なepineural suture法を推奨されていた(写真3)。

そのような時期に開催されたのが第2回末梢神経を語る会であった。その主題が神経縫合法と



写真2：伊藤鐵夫教授・第10回日手会々長
(1913.8.8.~2002.11.13.)



写真3. 津山直一教授・第12回日手会々長
(1923.12.8.~2005.2.5.)

決まり、funicular sutureとepineurial sutureの何れが優れているのかを議論する企画がなされた。1979年5月30日(水)の学会では内西謙一郎(慶大)、上羽康夫(京大)、中土幸男(信州大)、田島達也(新潟大)の4名が夫々の意見を発表した。其後に公開討論に入ったが、当日に津山教授は出席されていたが、伊藤教授は所用のため欠席された。当時まだ助手であった上羽は京大派を代表して討論に加わる羽目に陥った。津山教授はepineurial sutureは術中操作が簡単であり、縫合糸などの異物を神経内に残すことなく神経再生に有利なばかりでなく、神経内縫合ギャップが在っても断裂神経中枢部から多数のsproutingが伸びて、選択的に末梢の神経鞘内に入るのでepineurial sutureの方が臨床上優位であると理路整然と語られた。私はそれに対して、「sproutingによる神経修復は確かに起こり易いが、断裂神経近位端からのsproutする多数の細い神経線維からは虚弱で断裂遠位神経端に到着する刺激伝達力は低下する。近位神経断端から大きな電気刺激を遠位の神経線維に伝達させるには近位運動束を遠位運動束に正確に縫合し、知覚神経束も同様に知覚神経束同士を合わせてこそ強い刺激伝達力を復元し、優良な手術結果が得られると考える。丁度、ショットガンで獣を取る様なものでウサギのような小動物を捕らえることは出来ても、ライオンのような大きな獲物を得るにはライフル銃のように強力な一つの弾を使うべきでしょう。神経縫合によって手の精細な運動・知覚を正常に回復する為にはfunicular sutureが必要であろう」と反論した。会場からは大拍手が起こった。勿論、私の論旨に大賛同して呉れたというよりも、雲上人の東大教授に恐れ気もなく堂々(?)と物申す新参の私に呆れ果てての拍手であった。当時の常識では考えられない無礼で非常識な発言はアメリカ帰りの医師にしかできぬ不躰千万な発言であったに違いない。実は、私自身も後日大いに反省した。だが、津山教授はその後も親しく声をかけて下さり、定年後に所沢リハビリテーション所長に就任された後でも研修講演会講師として私を招いて頂き、親しくお話をする機会を作って下さった。学問に於いては年齢や地位は関係なく、対等に討議して頂いた。先生のおおらかな寛容性に触れ、今も先生に深く感謝し、尊敬している。このように偉大で寛容な指導者が居られたので、日手会は順調に発展できたのであろう。

其の後、東大epineurial suture法は日本各地に広がったばかりでなく、その理念は原徹也から初代日本ハンドセラピィ学会会長 椎名喜美子OTRに引き継がれ、今日のハンドセラピスト達に至っている。他方、京大funicular suture法は田村清を経て、柿木良介らに引き継がれ、神経移植術や神経移行術には広く用いられている。末梢神経縫合法は手の機能回復に極めて大きな影響をもたらす。現代社会を支える手の機能は間断なく行き交う大脳皮質と手との情報交換に基づくものであり、手の正常な知覚・運動機能を維持するには上肢末梢神経の正常な働きが正に必須である。末梢神経縫合法の問題は手外科の最重要課題であると言えよう。断裂神経を縫合して正常な手の機能を回復させようと望むならば、もう一度末梢神経の構造と機能を根本から見直し、脳からの刺激が手に到達する画期的な縫合法の開発が必要であろう。

1957年「日本手の外科学会」として発足した本会の名称は「日本手外科学会」と若干変化したものの21世紀初頭まで順調に発展し、2010年5月以降は一般社会法人として発展し続けたのである。歴代の理事長・役員・評議員らの手腕とご努力に感謝し、今後とも整形外科と形成外科が融合した新しい我国独自の専門分野として幸運な発展を続けるよう祈念する。

第28回手外科親睦テニス大会 報告記

浦部 忠久

足利赤十字病院

第28回テニス大会は2018年4月18日に品川プリンスホテル高輪テニスセンター室内コートにて開催され、総勢24名が参加しました。

好プレーあり、珍プレーありの熱戦が繰り広げられ、あっという間に3時間が経過しました。田中利和先生vs副島修先生の因縁対決？では今回は副島先生に軍配が上がりました。学会場とは違い、さわやかな汗をかくことができましたし、プレー後のビールの味はまた格別でした。普段運動不足気味の先生には、後日の筋肉痛は必発ですが、当日は幸いなことにけが人もなく無事終了できました。

サプライズとして、生田義和先生自らが作成された、手作りのラケット型優勝杯(津下健哉杯)と歴代優勝者名を記載したプレートを寄贈していただきました。そして優勝して栄えある津下健哉杯を最初に手にした選手は副島美恵子選手となりました。今回4位となった夫君、副島修選手を抑えての受賞となりました。誠にありがとうございました。

優勝杯には津下先生からのメッセージも添えられています。

「優勝おめでとうございます。ですが、テニスなどのスポーツも手の外科医には大切な要素ですが、専門職としての勉強と手術の鍛錬には今後も一層努力してくださいね。津下健哉」



	歴代優勝者	回	年度	会長	開催地
第1回	優勝者は決めず	32	1989	鈴木 勝巳	北九州
第2回	土井 照夫	34	1991	渡辺 好博	山形
第3回	高橋 輝一	35	1992	上羽 康夫	京都
第4回	生田 義和	36	1993	石井 清一	札幌
第5回	田中 寿一	37	1994	生田 義和	広島
第6回	岡 義範	38	1995	児島 忠雄	東京
第7回	阿部 宗昭	39	1996	茨木 邦夫	宜野湾
第8回	今枝 敏彦	40	1997	阿部 正隆	盛岡
第9回	金谷 文則	41	1998	玉井 進	大阪
第10回	阿部 宗昭	42	1999	藤巻 悦夫	東京
第11回	田中 寿一	43	2000	平澤 泰介	京都
第12回	加藤 悌二	44	2001	山野 慶樹	大阪
第13回	高橋 雅足	45	2002	吉津 孝衛	新潟
第14回	麻生 邦一	46	2003	中村 蓼吾	名古屋
第15回	加藤 悌二	47	2004	阿部 宗昭	大阪
第16回	原田 香苗	48	2005	土井 一輝	下関
第17回	高松 聖仁	49	2006	長野 昭	浜松
第18回	玉井 和夫	50	2007	萩野 利彦	山形
第19回	金谷 文則	51	2008	落合 直之	つくば市
第20回	原田 香苗	52	2009	堀内 行雄	東京
第21回	高橋 雅足	53	2010	柴田 実	新潟
第23回	優勝者なし?	55	2012	別府 諸兄	横浜
第24回	入江 弘基	56	2013	田中 寿一	神戸
第25回	岡本 秀貴	57	2014	金谷 文則	宜野湾
第26回	林 淳二 岡本 秀貴	59	2016	水関 隆也	広島
第27回	堀井恵美子	60	2017	平田 仁	名古屋

こうしてみると手外科学会長になるにはテニス大会での優勝も条件のひとつに見えてきます(あくまで個人的な見解ですが)。

次回は北海道で行われます。青木光弘先生、佐々木勲先生、お世話になります。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第62回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2019年4月18日(木)～19日(金)
会 場：札幌コンベンションセンター
会 長：岩崎 倫政(北海道大学大学院 医学研究科 整形外科学分野)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jssh2019/index.html>

.....

◆第25回春期教育研修会◆

会 期：2019年4月20日(土)
会 場：札幌コンベンションセンター
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆第4回日本手外科学会カダバワークショップ◆

会 期：2019年8月29日(木)～8月30日(金)
会 場：札幌医科大学医学部 北1講義室、解剖実習室
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第25回秋期教育研修会◆

会 期：2019年8月31日(土)～9月1日(日)
会 場：北海道立道民活動センター [かでの 2.7]
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

関連学会・研究会のお知らせ

◆第36回中部日本手外科研究会◆

会 期：2019年1月26日(土)
会 長：柿木 良介(近畿大学医学部 整形外科)
会 場：京都府民総合交流プラザ 京都テルサ(京都府京都市)
詳 細：<http://www.acplan.jp/jssh36chubu/>

.....

◆第33回東日本手外科研究会◆

会 期：2019年2月2日(土)
会 場：朱鷺メッセ
会 長：坪川 直人(新潟手の外科研究所)
詳 細：<http://admedic.jp/ejssh33/index.html>

.....

◆第31回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2019年2月8日(金)～9日(土)
会 場：グランドパーク小樽
会 長：和田 卓郎(済生会小樽病院 整形外科)
詳 細：<http://convention-w.jp/elbow2019/index.html>

.....

◆第40回九州手外科研究会◆

会 期：2019年2月16日(土)
会 場：長崎大学医学部 記念講道館・良順会館
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座 形成再建外科学)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/khand/index.html>

.....

◆第24回日本形成外科手術手技学会◆

会 期：2019年2月23日(土)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：前川 二郎(横浜市立大学形成外科)
詳 細：<http://jsitps24.umin.jp/>

.....

◆第31回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2019年4月19日(金)～20日(土)
会 場：札幌コンベンションセンター
会 長：越後 歩(札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター)
詳 細：<http://meeting31.jhts-web.org/index.html>

◆第92回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2019年5月9日(木)～5月12日(日)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：山下 敏彦(札幌医科大学医学部 整形外科学講座)
詳 細：<http://www.joa2019.jp/>

.....

◆第62回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2019年5月15日(水)～5月17日(金)
会 場：京王プラザホテル札幌 ロイトン札幌
会 長：山本 有平(北海道大学形成外科)
詳 細：<http://jsprs2019.jp/>

編 集 後 記

日手会ニュースは第50号の節目を迎えました。

第61回日本手外科学会学術集会では稲垣克記会長の企画で、マイクロサージェリー、関節鏡による最小侵襲手術、そして人工材料による治療をテーマに盛会のうちに幕を閉じました。また、手外科パトリレーは第3回を上羽康夫先生にご担当いただき、手外科の歴史や末梢神経障害に対する治療の歴史をお示しいただきました。日本手外科学会では第30回日本医学会総会で日手会の歩みや近年の発展についてのポスターを掲示する予定です。現在手外科学会は第6期「成熟の時代と再生医療、人工材料への挑戦」にあたり、肋軟骨移植による関節形成術、手関節鏡によるTFCC修復術、およびコンピュータシミュレーションを用いたカスタムメイド骨接合プレートを用いた上肢変形矯正手術が近年の発展とされます。今後も新しいアイデアを大切に、さらに日本手外科学会が発展していくことを期待します。

(文責：佐竹 寛史)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，委員長：白井久也)

委員：大江隆史，岡崎真人，岸 陽子，佐竹寛史，辻 英樹)